

—— チェルノブイリに思いをよせて ——

ポレーシエ

ちょっと頼れない代表ですけど
よろしくお願いします

市原佳代

「ボルシチ食べたさ」にウクライナ講座に出席し、「旅行したさ」にスタディ・ツアーにも参加、そして「暇があるから」と始めたお気楽週末ボランティアのはずが、ついに代表とは…。

町内会のように、持ち回りで代表を決めるチェル救のさだめとはいえ、想定外でした。任期は2年、事務局と運営委員の皆さんの足を引っ張らないよう、気負わず頑張りたいと思います。

ところで、最近「人海戦術」という言葉がお気に入り、よく使っています。私は怠け者なので、独りで面倒な仕事をするのは億劫になりがちですが、大勢でわいわいやれば、それはとても楽しい時間に変身するのです。遠い彼の地に思いを馳せながら、彼らの苦しみのほんの一部分でも理解する、そんな時間を志の同じ人たちと共有する。怠け者の私のくせに、チェル救の活動が長続きしている理由です。

日本のようにすべてに恵まれている国で暮らしていると、理不尽な困難を背負わされている人々を忘れてしまいがちです。貧困、戦争、放射能…。「チェルノブイリ」は、その人たちのことを忘れないようにするためのおまじない。「チェルノブイリ」を唱えながら、そのことを人々に伝えるための努力を「人海戦術」で進めていきます。



向かって右側が市原さん<ナロジチにて>

〒466-0822 名古屋市昭和区楽園町137 1-10

チェルノブイリ救援・中部 代表：市原佳代

郵便振替：00880-7-108610

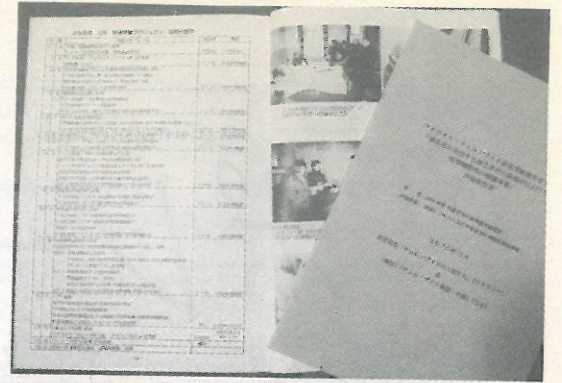
TEL/FAX：052-836-1073（月・水・金 10:00～17:00）

E-mail：chqchubu@muc.biglobe.ne.jp

ホームページ：http://www.chernobyl-chubu-jp.org

「評価報告書」が完成しました!! (神野英樹)

ポレーシェ 86~87 号にかけて報告してきました「評価プロジェクト」が終了し、一冊のパンフレットができ上がりました。全 73 ページの大作です。是非、読んでください。(入手を希望される方は、事務局までご連絡ください。)



【あとがきより】

今回の評価事業は「救援・中部」が発足し(15 年目にして)初めて、じっくり腰を落ちつけて今までの活動を振り返り、今後の活動のあるべき姿を考える絶好の機会となりました。

今まで私たちは、「そこに支援を必要としている人々がいるかぎり、活動を続けたい」と、いつも前のめりになって、突き進んできたような気がします。その結果、時として自分達の活動を「救援活動のデパート」「走りながら考える自転車操業」などと表現してきたように、過去活動を振り返り次の活動に生かす「評価活動」が、不十分であったことも事実です。

なるほど、私たちは、日常において、絶えず「昨日を振り返り明日どうするか」を考えながら生活しています。仕事を行う場合にも、「S (サブジェクト) → O (オブジェクト) → A (アクト) → P (プラン) (主観的に情報を収集し、客観的に検証を行う。そして、評価して次の計画を立案する)」というサイクル、あるいは、「P (プラン) → D (ドゥ) → C (チェック) → A (アクト) → P (プラン) → ……」というサイクルを、いかに効率よく回転させるか、特に「A (アクト) → P (プラン)」や「C (チェック) → A (アクト)」のステップを重要視して、「費用対効果」「努力対効果」を最大限に引き出す活動を展開しています。

次々と明らかになる被災者達の悲惨な実態を目の当たりにし、とにかく走り続けてきたことに対して、私たち「救援・中部」は、「走らなかったよりも大きな成果を残してきた」と自負していますが、反面、いつも心の片隅には、「いつまで走り続けるのか?」「正しい道を走っているのか?」…という疑問を抱いてきた事も、紛れのない事実です。このような私たちのジレンマに対して、今回の評価事業は、きわめて明解な答えを導き出してくれたのです。

しかし、もう一方で、15 年間活動を続けてきた当事者にとって、当評価事業では、自己否定を余儀なくされる場面が少なからずあり、「客観的に自己評価することの難しさ」を実感した作業でもありました。具体的には、本「評価報告書」の『第 5 章第 3 節「救援・中部」の政策展開へのインパクト』の記述を精査するにあたり、激論があったことを付記しなければなりません。

結果として、当節は客観的かつ示唆に富んだ内容となり、有意義な提言としてまとめられたと思いますが、被評価団体の当事者としては、主観と客観の両面から自分自身を評価するという「内部評価」が、いかに難しいかを実感するプロセスでもあったわけです。既に理論構築された一定の基準に基づいて、「外部評価」をする方が、単純明快であり、楽な作業なのではないかとも感じました。内部評価の難しさは、構成員の経験・関わり方・思い入れの深さ・情報量などさまざまな要因に左右されるものです。

いくつものプロセスで、理論と現実のギャップを感じたのです。たとえば、当評価事業を通して、私たちは『NGO の活動には、「緊急支援」→「復興支援」→「自立支援」→「社会への提言」という 4 段階の進化がある。(デヴィッド・コーテンの開発理論)』ということ学びました。これは、「マズローの 5 段階欲求説」に相通する興味深い理論であり、私たちは今更ながら、今までの活動のプロセスを整理する上で、「目からウロコ」のような発見をすることができました。

しかし、この「進化論」は、一般的な活動の道標ベとしては、大いに参考となりますが、反面、現実支援活動を進める上では、「理論に固執すると臨機応変に対応できない」など、机上の空論となる可能性を秘めているのではないかと感じるのです。

周知の通り、私たちの支援対象は、「放射能による被災者」そして「かつては先進国であった社会主義国」といった、特殊な状況があります。このことは、従来の「発展途上国支援」とはかなり異質な前提条件を持っています。放射能による災害は、たとえば半減期 30 年の核種（セシウム 137）を例にとりますと、30 年経過してなお半分が残存して猛威をふるい、食物連鎖により、何年も経過してから人間の生活圏に入り込んできます。色も臭いもありません。一見、平静を取り戻した社会の中で、根強く「緊急支援」を必要とする生活圏が存在するのです。

また、ウクライナ国は、事故が起きるまでは、先進国を自負していた国家の一部であり、社会主義という独自のシステムを構築してきた彼らにとって、私たちの資本主義的な再建策は、直ちには受け入れがたいという側面があったのでしょう。事実、私たちにとっては常識的な提案だと確信していても、現地にとっては非常識（非現実的）であったためか、すんなりとは受け入れられない事例がいくつもありました。

たとえ、理論武装をしていなかったとしても、私たちは、たえず現地のニーズを尊重し、10 年に及ぶ「魚と釣り竿」の論争を通じて、現地の自立を模索してきました。私たちの活動は、大いなる試行錯誤の繰り返しであったかも知れません。しかし、期せずして、NGO の活動を「理論的」かつ「客観的」に評価する、絶好の事例を提供することにもなりました。今後、より柔軟性に富んだ「評価理論の再構築」に役立つことを願ってやみません。

当評価事業により、私たちは、評価の重要性、そして感情的な精神論に陥らず冷静な議論を続けていく必要性を、痛感しました。これは私たちの今後の活動のあり方に、必ずポジティブな影響をもたらすでしょう。

改めて、ご協力いただいた皆様・関係者の方がたに感謝の意を表明したいと思います。

ウクライナ講座 8月20日

既にお知らせしておりますように、2006 年 4 月に、第 4 回「スタディ・ツアー」を開催いたします。前回お知らせした予定と、若干変更点がありますので、お知らせします。

- ・「スタディ・ツアー」の期間は、2006 年 4 月 23 日から 5 月 3 日です。
- ・ルフトハンザ航空を利用し、中部国際空港からの発着を予定しています。
- ・費用は今のところ 28 万円かかる予定ですが、もう少し安くなるかもしれません。

また、「スタディ・ツアー」に向けての募集チラシを作成しました。できるだけ多くの人に参加してもらうために、いろいろなところに置いて、「スタディ・ツアー」を PR していきたいと思います。チラシを置かせてもらえる場所がありましたら、ぜひ事務局までお知らせください。

次回のウクライナ講座は、8月20日午後 1 時 30 分より、なごやボランティア・NPO センター（地下鉄伏見駅徒歩 5 分）にて行なわれます。主に「スタディ・ツアー」で行なわれる「ウクライナと日本の市民交流デー」について、話し合いたいと思います。また、ウクライナでぜひ訪れてみたい場所や、知りたいことがありましたら、どんどん提案してくださいね。皆様の参加を、心待ちにしております。（鈴村）



＜ウクライナの子ども達＞

「チェルノブイリ連絡会」で意見交換・情報交換！

去る6月25日（土）、チェルノブイリ救援団体の連絡会が、東京のカタログハウスで開かれました。出席者は、「エストニア・チェルノブイリ・ヒバクシャ基金（東京）」「ジュノーの会（広島）」「世界核被災者医療交流委員会（東京）」「チェルノブイリ子ども基金（東京）」「チェルノブイリ支援運動・九州」「チェルノブイリ被害調査・救援 女性ネットワーク（東京）」「日本チェルノブイリ連帯基金（長野）」「チェルノブイリの母子支援募金（東京）」「原子力資料情報室（東京）」「チェルノブイリ救援・中部」と、信濃毎日新聞の27名でした。

各団体からの活動報告と、2006年のイベント『チェルノブイリ 20年に向けて』に関する、意見交換・情報交換が行われました。以下は、各団体の近況報告です。

「チェルノブイリ子ども基金」

1991年、子ども基金の前身を広河隆一さんと設立した。子どもを日本に招待し、遊びを通して交流をしてきたが、その子ども達も19～20歳に成長し、近年は職業技術訓練を行うようになった。支援の内容は、「学業支援や母子支援（甲状腺切除術をした母と子）」に変わってきている。

「ジュノーの会」

大きく、医療班と社会班に分かれて活動をしてきた。「甲状腺検診」は、当初の目標を達成。医師による検診の結果、明らかに甲状腺癌が増加している。人々は当初、血液検査の意義を理解せず、「モルモットにされている」と憤りがあったが、血液データを本人に戻すことで、7年間続けることができた。患者に聞き取りを行って、被曝者の気持ちを深く知る必要があった。検診結果報告カードは、2ヶ月以内に患者に届ける。

支援している病院では、「白血病の5年生存率6割以上」を6年前に達成した。しかし、血液感染症（二次感染）による死亡や輸血での肝炎が多い。病院間の連携がなく、感染症予防の受け皿が整っていない。医師の努力で、100%肝炎ウィルスを発見しても、一つの薬品会社が国の95%のシェアを持っていて、他の薬剤を使用できず、政治的な壁があり、救えない命がある。今後どうしたら良いのか。医療の壁には、NGOの力では小さすぎる。

「プリピャチからの移住者」は、19年の間に高い意識が育っている。現地の要望では、甲状腺癌や白血病だけでなく、一般的な疾患にも応えてもらいたいと言う。どこと違って悪くないのに、病院へ行くのは何故か？ 医師が言葉をかけてくれることが救いだと知った。

「エストニア・チェルノブイリ・ヒバクシャ基金」

7月2日～8月4日に、長崎から広島まで、1トンの石を引いて歩く会を行う。「バルトの被曝者」の冊子ができた。

「日本チェルノブイリ連帯基金(JCF)」

小児白血病を支援している。ポーシェ学校で検診を実施している。近年、治療薬も手に入るようになったことから、自立してきたと判断した。現在、支援先をイラクやヨルダンに移行しつつある。

「チェルノブイリ被害調査・救援 女性ネットワーク」

環境汚染と次世代への影響について、本を執筆中。

「チェルノブイリ支援運動・九州」

1997年に、「雪だるま号」検診車で、胃がん検診から始めた。現地には、定期健診システムがないので、昨年「カタログ母子支援基金」に申請して、エコーを贈った。2006年3月中旬に、広島大学でチェルノブイリ関係者を招いて、会議を開催する予定。（詳細は後日）

「原子力資料情報室」

来年『チェルノブイリ 20 年に向けて』というイベントを計画している。各地の取り組みを、HP で公開したいので、情報を寄せて欲しい。

「世界核被災者医療交流委員会」

被曝者の遺伝子や染色体異常調査、医師との協力、データ集めなどを行ってきた。11 の被災者家族の定点観測中。(P6~P7 の特集を参照してください。) 近年、予算不足のため、現地での講座がなくなった。造血器疾患治療センターの設立に、協力している。

「ロシア・ベラルーシ・ウクライナの閣僚会議が、2006 年 4 月 26 日に、ミンスクで国際会議を開催することを決定した」との発表があった。その会議に、NGO の活動が加わるかどうかは未定。また、2005 年 9 月 6 日には、WHO と IAEA がウィーンで会議を開く。その後、イスラエルでも会議の開催予定あり。

「チェルノブイリ救援・中部」

昨年度、「外務省草の根支援」を活用し、「移住者村の 27 診療所に対する医療機器配備事業」を実施、また、その評価事業を行い、報告書にまとめた。今年度はその経験を生かして、ナロジチ地区の診療所への医療機器配備と、地区病院へのレントゲン配備等を申請する予定。アンケートの集計結果により、機器を選定する。

2006 年 4 月 26 日に、現地の 20 周年の慰霊イベントに参加する「スタディ・ツアー」を行う。現在、参加者を募集中。

(戸村 & 美知江)

外務省「日本 NGO 支援無償資金協力セミナー」に参加しました。

7 月 9 日(土)、伏見ライフプラザ第一研修室で、上記のセミナーが開催されました。

外務省が、国際協力を行う NGO に対して実施している支援策の一つに、「日本 NGO 支援無償資金協力」があり、その内訳は、①開発協力事業支援 ②NGO パートナシップ事業支援 ③NGO 緊急人道支援 ④リサイクル物資輸送費支援 ⑤マイクロクレジット原資支援などとなっています。

2004 年度、救援・中部は、「リサイクル物資輸送費支援」として航空輸送費約 28 万円を申請し、パルスオキシメーター 10 台(州立小児病院と市立小児病院各 5 台)を送ることができました。その経験から、この支援の良いところや改善点を提案し、質問をしました。

今まで、日本国内において無料で提供された中古医療機器を現地に送る時、特殊な梱包と輸送に高額な費用がかかることを残念に思っていました。その費用が交付されたことに対しては、とても感謝しています。しかし、申請条件に「現地に日本人が駐在する事務所があること」や「外貨を送金するための銀行口座があること」など、救援・中部にとっては、今まで必要性を感じていない条件がありました。救援・中部は、この条件を満たしてませんが、間違いなく現地に全ての支援物資を届けています。特に、機器を輸送する時は、前払いで日本の業者に輸送費を支払っているため、全く意味のない条件だということを説明し、「個々のケースによっては、必ずしも必要ではない条件なので、再考していただけないか？」と質問しました。即答は得られませんでした。検討するという回答をいただきました。

今回のセミナーで繰り返し話されたのは、正式な申請書を作成する前に「民間援助支援室」に電話をして、支援内容の確認や疑問点を解決し、申請書類内容に不備がないように、「予め相談して欲しい」とのことでした。「そのような相談に応えながら、速やかに交付できるように協力したい」と、町田事務官からもお話がありました。

(美)



＜JICA 担当者の説明を受ける＞

特集!! 被災者家族の取材報告

19年目のチェルノブイリ 菅聖子（フリーライター）

チェルノブイリ事故から19年目の春。「被ばく地に住む11家族の定期訪問」の7回目の取材に同行させていただき、医師の佐藤幸男さん、細胞検査士の松浦千秋さんとともに、ロシア・ウクライナ・ベラルーシ3カ国を訪問してきました。被災地に暮らす普通の人たちは、この19年をどんな思いで過ごしてきたのでしょうか。ふたつの家族をご紹介します。



〈アントン君の自宅で（左から松浦千秋さん・アントン君の主治医チュムト医師・アントン君・おばあちゃん・佐藤幸男医師・菅聖子さん）〉

シャブルク家——ジトーミル（ウクライナ共和国）

「事故が起きず、プリピャチに住み続けられたなら、

娘はこんなことにはならなかった」

アパートの玄関が開いた瞬間、おばあちゃんの目から、みるみる涙がこぼれるのを見ました。日本から訪れた松浦千秋さんをきつく抱きしめ、声も上げずにただ泣いています。おばあちゃんを受け止める松浦さんの目にもまた、涙が光っていました。

数ヶ月前、この家のお母さんアラさんが41歳の若さで亡くなりました。アルコール依存症だった彼女は、ある朝ベッドで目を覚まさないまま死んでしまったのです。「娘のことを思うと、まだ心が痛い」。そんなおばあちゃんを支えるように、傍にはアントン君（21歳）が立っていました。彼もまた、母が亡くなった事実を受けとめきれず、心がさまよっているようでした。

シャブルク家は、チェルノブイリ原発から1.5kmのプリピャチに暮らしていました。事故が起きたのは、アントン君2歳、弟のオレグ君が5ヶ月のとき。2日後、強制的に町を離れさせられた彼らは、ペットも荷物もそのままなのに、二度と家に戻れなかったのです。

やむにやまれぬ生活の変化は、一家の心身に大きな影響を及ぼしました。アントン君は体が弱く、他の子と比べてずいぶん発育も遅れました。そして、アントン君の両親が陥った、アルコール依存…。「事故が起きず、プリピャチに住み続けられたら、娘はアル中にならなかったし、死ぬこともなかった」とおばあちゃんが涙声でつぶやきます。

アントン君は、お母さんの話はほとんど口にしませんでした。一緒に暮らす父親についても、多くを語りません。頼りにできるたった一人の弟オレグ君は、今年の秋まで兵役中。アントン君は現在、建築現場で解体作業をしています。肉体労働はつらく、給料もよくはない。

「でも、弟の兵役が終わったら、二人で一緒にやりたいビジネスがあるんです。車の免許もとりたいし、通信大学で教育も受けたい。いろいろな可能性を探りたいんだ」

アルコールにおぼれる両親を見てきたからか、「自分がしっかりしなくては」との思いが人一倍強いアントン君。やさしくストイックな彼が、本当の自由を手にするのはいつの日でしょう。

シニャエフ家——モスクワ（ロシア共和国）

「今度同じような事故が起きたら、誰が処理に行くのでしょうか」

シニャエフ家は、父のアレクセイさん（43歳）・母のエレーナさん（42歳）・長男のゲナジさん（21歳）・長女のナターシャさん（19歳）の4人。モスクワ郊外の3DKのアパートに暮らしています。お父さんのアレクセイさんは、頭痛や倦怠感から満足に働くことができず、'92

年にチェルノブイリ事故による障害者として認定されました。彼は、「リクイデータ」と呼ばれる事故後の除染作業者なのです。

事故から3ヵ月たったある夜。突然、警察官と軍人がやって来て、「30分以内に集まるように」とアレクセイさんに告げました。何をするかもわからぬまま、指定場所に行ってみると、男たちが大勢集まっていたといいます。身体検査の後、すぐにチェルノブイリに送り込まれました。

慌てたのは妻のエレーナさんです。当時はゲナジが3歳、ナターシャはまだ8ヶ月。「夫がいなくなり、パニックを起こしそうでした。こんなことになるってわかっていたら、彼が出かけることは許さなかった」と語ります。

リクイデータは、旧ソ連全土に60万人とも80万人とも言われます。すでに亡くなった人も多く、アレクセイさんのように精神神経系の病を抱える人も多いそうです。最近のアレクセイさんの悩みは、医療費や公共料金の免除、優先的な保養など、リクイデータに与えられてきた特権が、わずかな金銭支給に変わることに。それについて、ロシア首相フマトコフが出した指示書には『リクイデータが予測どおり減っていないため』と書かれていました。

「特権が、国家予算に負担をかけているのはわかりますが、われわれに早く死んでくれと言っているも同然じゃありませんか！ 結局、国家にとって我々は、使用済みのゴミにすぎないんだ」

アレクセイさんの吐き捨てるような言葉に、私は何も言うことができませんでした。しかしそれでも、彼は言うのです。

「事故後19年たった今も、石棺は崩れかけたまま。それを思うと、涙が出てくる日もありますよ。今度あのような事故が起きたら、誰が処理に行くのだろう……と」

私は彼に問うてみました。

「そんな苦しい思いをしているのに、チェルノブイリを忘れたくはないのですか？」

「どれほど現場がひどいことになっていたか、私はこの目で確かめてきた。だからこそ心配なんだ。事故は私の体に潜んでいる。忘れることはできないよ」

シャニエフ家は、おだやかな雰囲気ただよう、仲のよい家族でした。みながアレクセイさんの体調を気づかい、いたわっていることが伝わってきます。

「父がチェルノブイリに行ったことを、友だちに隠していた時期もあります。差別があったので言いたくなかった。でも、父の健康のことはいつも気になっています」

と言うのは、娘のナターシャさん。障害を負った父の痛みを、子どもたちもさまざまな形で背負ってきたのでしょう。一家の大黒柱であるお父さんが働けなくなるということが、家族にとってどれほどの痛手であることかを思います。

普通の家庭を訪ねて痛感したのは、彼らの日常に、事故の現実が深く根強く浸透していたことでした。もちろん、人々には日々の暮らしがあり、食べるため、子どもを育てるために明るく生きています。しかし19年たった今も、どこかに小さな不安があって、何かが起きるたびにその不安が噴き出してくる。家族の病气、身近な人の死、不安材料はいくらでも転がっているのです。そんな中でも、家族と身を寄せ合うように絆を強めていける人もいれば、アルコールにおぼれて亡くなる人もいました。人って強いなあと感動する反面、あっという間に壊れてしまう弱さを持つのも人間だと感じます。

彼らのいたみに共感し、繋がっていくこと。それしか、できることはないように思いました。どうすれば、その思いを持ち続けられるだろうか。あれから私は考え続けています。

(連載 その4)

支援はチェルノブイリの子ども達が優先！

「チェルノブイリの人質たち」基金代表

ヴラディーミル・キリチャンスキー

チェルノブイリ原発事故の結果被災した、ジトーミル州民達に「チェルノブイリ救援・中部」が人道支援を行い始めてから、今年8月で15年経つことになります。

最初の代表団の訪問の際、支援の大部分は子ども達を対象とするということが明らかにされました。したがって、その後の主要な支援先は、ジトーミル州立小児病院と同市立小児病院になったのです。

その後、ウクライナ側の要請により、州立孤児院も支援の対象に加えられました（粉ミルクや食品の支援だけではあります）。

州立小児病院は、これまでの支援総額の3分の1にあたる支援を受けています。いろいろなセクションで用いられる機器（のちになって、支援の対象は新生児集中治療室と血液腫瘍セクションに限定されました）・医薬品・粉ミルク等の食品です。市立小児病院には、主に粉ミルク支援が行われ、それに次ぐのが機器の援助です。これらの支援先の他、「救援・中部」は3度にわたって、フェニールケトン尿症の子ども達のため、特殊ミルク購入用の資金を提供しています。

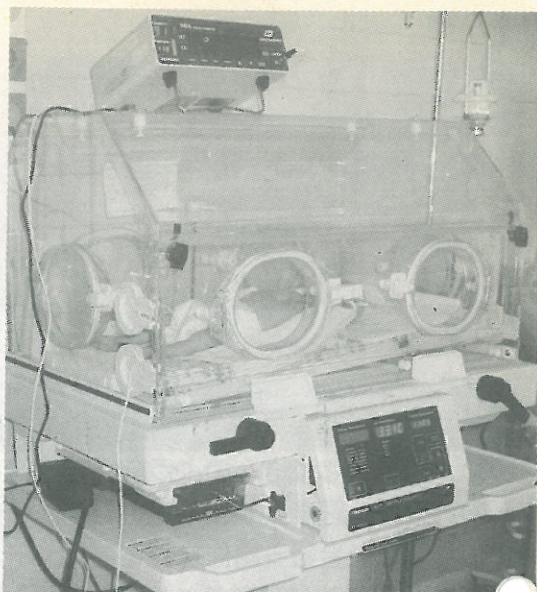
いずれの場合にも、支援は「チェルノブイリの人質たち」基金を通じて行われました。それはかなり困難なプロセスでした。というのは、ソ連崩壊後、人道支援の受け取りに関する法律が整備されていなかったからです。また、船便で送られてきた貨物の受け取りについても問題が生じました。これらの点を考慮して、「救援・中部」は、粉ミルク・医療機器・医薬品の現物提供をやめ、現地ですべてを購入するための資金を送ってくるようになりました。

子ども達を重要視するということは、支援が純粋に子ども関係の施設のみに対して行われ

るということの意味したわけではありません。例えば、放射線から住民を防護するセンター「デニシ」は、2度医療機器購入資金の提供を受けています。同センターの保養者のほぼ半数は児童なのです。

ブルシロフとナロジチ両地区病院の小児科のためにも医薬品が購入されています。これらの病院への「救援・中部」の支援は、すでに長期にわたって続いています。

「チェルノブイリの人質たち」基金もまた、



〈新生児集中治療室へ贈られた医療機器〉



〈日本からの支援報告を聞く州立小児病院の医師達〉

自分たちができる範囲で、子ども達への支援をしています。その主なものは、「チェルノブイリの1グリヴナ」キャンペーンでした。第1次キャンペーンは、2002年から2003年にかけて行われ、第2次キャンペーンは現在行われているところで、2006年4月26日、つまりチェルノブイリ原発事故20周年の日まで続けられることになっています。集まったカンパのすべては、第1次キャンペーンの時同様、州立小児病院血液腫瘍センターで必要な機器の整備に



〈州立小児病院の遊戯室で(2005.02)〉

用いられます。過去に行われた支援、そして第1次キャンペーン時に集まった資金を併せると、同センターにはすでに9万ドル以上の支援が行われたことになります。現在、血漿成分分離器の買い付けが行われつつありますが、そのウクライナでの価格は、1年間の消耗品とあわせて約10万ドル。この機械が入手されれば、血液腫瘍センター創設事業はほぼ完了することになります。書類上2000年11月30日に設立された血液腫瘍センターは、多くの点において「チェルノブイリの人質たち」基金のおかげで、現代の治療水準に応えた施設となり、患児をキエフの施設に運ぶ必要がなくなったのです。

「人質たち」基金は、自己資金（これも現地のカンパによるものですが）で入院している子ども達のための児童書を買ったり、クリスマス前の聖ニコライの日（12月19日）に、州立小児病院の患児やナロジチの消防士たちの子ども達のため、プレゼント贈呈やお芝居などの催しを行ってきました。

昨年には、州内の児童を対象に「子ども達の手で見たチェルノブイリ」という絵画コンクールを行い、その作品は今、日本で展覧されています。現在、チェルノブイリ20周年にちなんでのクイズと作文のコンクールが始まっています。クイズの質問は、ウクライナと日本の両国に関係するものです（日本は世界で初めて原爆による被害を受けた国であり、今年はその60周年です）。



〈州立小児病院に入院中の子ども達と母たち(2005.02)〉

子ども達に対するこのような支援は、州または国レベルのマスコミによって定期的に報道されています。日本国外務省の「草の根無償支援」プログラムによる、移住者の村への医療機器提供に関する報道も広く行われました。この支援は村の住民数や児童数にも配慮して行われています。そして現在も「人質たち」基金は、州立及び市立の小児病院の、同プログラムへの申請に際して支援をしているのです。

私たちが救援の対象としている、ウクライナの放射能汚染地域「ナロジチ」には、今も 10,000 人を超える人々が暮らしている。本来なら、この地域は全員が安全な場所に移住しなければならないが、ウクライナの経済破綻により移住政策は挫折し、この地域は「住んでも良い地域」に格上げ（格下げ？）された為である。この地域の救援をさらに充実させるために、私たちは、ナロジチ地区の 23 の地域病院や診療所に、アンケート調査を実施した。ここに紹介するのは、その結果の一部である。

若者が流出し高年者が残ったナロジチ

ナロジチ地区は、訪問の度に寂れていく様子がわかる。以前にも書いたが、戸外に人の姿はなく、家々の窓は閉ざされている。若者は、未来のないこの町から逃げ出し、子どもと老人が残った。その様子が、このアンケート結果からも見て取れる。

右の表は、ナロジチ地区にある地区病院と村の診療所（合計 23）の対象人口と、その病院・診療所の扱う主な病気をあげたものである。アンケートの太まかなまとめであり、「病気の分類方法」や「全部の診療所が答えていない」など不完全ではあるが、この地域の病気の様子は良くわかる。一言で言えば、住民の多くは高齢者特有の「高血圧・心臓病・骨軟化症」などの典型的な成人病に罹っている。

病気の原因は高年齢化と貧困、放射能

これらの病気は、一般に高齢者に多いものだが、ナロジチ地区ではそればかりが原因ではない。チェルノブイリ事故による放射能汚染により、この地域の特産だった「ナロジチ織り」の繊維産業は崩壊し、人々の働く場は奪われ、収入の道が閉ざされて、人々を貧困が襲った。土壌汚染で、満足な農業もできなくなった。その様子は、南部の非汚染地域と比べれば一目瞭然である。貧困は偏った栄養を人々に強制する。また、放射能汚染により今でも 90%以上が基準を超える「きのこ」や「ベリー類」を、森で採取し食べている人もいる。牧草の汚染で、食肉も汚染している。

診療所があげた 多い病名	病院 診療所数	対象人口* (人)
高血圧	16	7,635
虚血性心疾患	7	4,869
気管支炎	6	2,177
骨軟化症	5	3,415
心臓血管系疾患	3	1,053
甲状腺疾患	2	1,957
腎盂炎	2	3,146
胆嚢炎	2	1,507
胃炎	1	62
すい臓炎	1	1,300
急性呼吸器疾患	1	207
消火器疾患	1	657
脊髄神経根炎	1	452
その他	1	663

(* 対象人口は患者数ではない)

学校給食の食材は、全て地域外からのものが使われているというが、子ども達も家に帰れば親と同じものを食べる。ナロジチ病院の測定によれば、住民の体内放射能は、シトミル州平均の 30 倍を上回る 10,000～20,000 ベクレルもあり、日本人の 500～1,000 倍である。放射能の最も一般的な影響は、通常言われる「ガンや白血病」ではなく、「加齢」即ち通常よりも早く年をとることである。実際に、「ナロジチでは、子ども達までが高齢者の病気である高血圧や心臓疾患に罹る割合が高い」ことが分かっている。

(河田)

竹内さんのウクライナ便り

ユシェンコ大統領の訪日に際して、同氏のインタビュー番組なども放映され、日本でもウクライナの現状に対する情報がそれなりに流れたのではないのでしょうか。大統領が日本に発つ直前には、これまで道路交通を規制していた「交通警察」を廃止し新しい組織を作れ、との指令が内務大臣に出されました。理由は、交通警察官が罪なき一般運転者に言いがかりをつけて「罰金」をむしりとり、それを私して小遣いを稼ぐ、などの不法行為がこれまで日常化しており、その状況が改善されないことに大統領が業を煮やした、ということのようです。

一方、ユシェンコ氏の子息が、チェコの会社の所有物であり、チェコからウクライナに持ち込まれて未だウクライナでの登録が済んでいないBMWを不法に運転していた、という事実が発覚してスキャンダルになっています。また、地方行政の単位（町村・地区・州）を改変し、町村や地区の数を大幅に減らすという、地方行政改革担当副首相ベススメルトヌイ氏のプランが地方での説明集会で批判を浴び、憤った同副首相が辞意を表明、大統領に慰留されるという事件？ もありました。そして、野党のみならず連立与党内部でも少なからず批判を受けつつも、最近の世論調査では国民の人気を集めているティモシェンコ首相に対する「暗殺計画」が発覚したとの報道もあり、刺激的なニュースにはとにかく事欠かないウクライナです。「暗殺」の計画者として疑われているのは、民営化入札のやり直しの対象の一つとして挙げられているニコポリ鉄合金工場に利害を持つ人物、また有名な某マフィア組織だそうです。

ところで、日本からのウクライナ入国に

際し今年9月からヴィザの制度が簡素化され、90日以内の滞在であればヴィザは不要ということになりました。同様の法改正が、アメリカやEUの市民に対して適用されたのに続く決定です。私は7月25日、ボリスポリ国際空港からウクライナを出て現在は日本滞在中ですが、出国の際少なからず驚いたことには、税関チェックがなくなっていました。以前は、1,000ドル以上の金額を持ち出す場合には必ず申告書を提出しなければならず、また荷物のX線検査もあったのですが。ちなみに同空港の増改築に対して、日本がODA援助をすることになっており、また京都議定書関係の協力、日本の国際協力銀行がウクライナの銀行に対してクレジット・ラインを設定するなどのプランもあるようで、両国間の経済関係も、徐々に発展の兆しを見せています。新政権成立後、ウクライナに対する西側の融資が活発化してきたことの一環といえるのでしょうか。私は、世界地図上のウクライナの位置に関しては、「オレンジ革命」後一般的日本国民の認識が多少は改善されたのではないかと希望的観測をしていましたが、帰国して最初に泊めてもらった奈良県東吉野村の旧友の話によれば、残念ながらそういう意識はあまり高まっていないようです。

(7月29日)



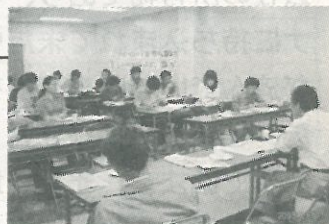
〈ジトーミル市内の銀行待合室で
書類内容の説明をする竹内さん(2005.02)〉

事務局便り

この夏は、愛知県幡豆郡幡豆町の教育委員会から、チェルノブイリについての学習会依頼があったり、犬山市立犬山中学の生徒さんたちが、「地域みらい総合学習」の一環としての校外学習で、「核被害」についての話を聞くため、事務局を訪れることになっています。ウクライナは、幡豆町のフレンドシップ相手国で、万博の「ウクライナ国ナショナルデー」とタイアップして、同町でウクライナ講座や音楽会を開催するという事です。万博はさておき、幡豆の皆さんに、「チェルノブイリ」のことを知っていただくにはよい機会ということで、事務局の河田さんが話に行きます。また、犬山中学は恒例の訪問となりますが、「第五福竜丸事件」については、東京の展示館に行って話を聞き、学習を深めているとのことで、「核被害について、深く教えていただきたい」との電話を、担任の先生からいただきました。

また、8月6日・7日には、恒例の「チェル救合宿」を伊那で開きます。①ホステージ基金との関係のあり方 ②国内の広報活動 ③来年度以降の事業について…ミッションの見直し・検討 ④臨床工学技士・北野さんの展開してきた「医療技術移転・医療機器メンテナンス事業」の今後の展開について…などについて、主に話し合う予定です。この合宿は、何かを決定するという性質のものではなく、参加者がテーマについて自由に意見を出し合い、じっくり話し合います。そして、今後の支援活動に生かそうというものです。合宿は2日間行いますが、2日目は運営委員会で懸案事項としてあがった、「会計方式」についても検討します。

話し合った内容は、次号(89号)でご報告いたします。(山盛)



去る6月11日(土)、中小企業センターにおいて「総会&チェル救デー」が開催されました。総会については、すべての議案にご賛同いただき、無事終了しました。チェル救デーでは、参加者の多くから、現在のチェル救の深刻な悩み＝活動の不活性化＝について、活発かつ辛口の意見が出、緊張感あふれる話し合いの場となりました。参加者の中には「今までの中で、一番面白いチェル救デーだった」と話していた方も。来年のお越しをお待ちしております。(市原)

編集後記

- ☆電車のドアが開いた途端、これでもか!と蝉の大合唱。夏の到来は肌でわかっているからね。「し〜っ!」もう!朝からうんざり。キエフのような“静かな夏”もいいなあ。(美)
- ☆どうしてももう一度見たい、とずっと思っていたアニメが、四半世紀ぶりにBSで再放送された。当時は主人公の少女と同じ年だったのに、今では母親役の年を越えた。(佳)
- ☆井の中の蛙のように、世間知らずな「原子力村」の専門家達。「原発の寿命は、切り貼りすれば60年!」とか、「核のゴミは、埋めて捨てれば安上がり。CO₂も出ない」と放言する。「想定外事故」のネタは増える一方だが、その事を熟知している彼等は、「原子力村」から遠く離れた都会に住んでいる。…私は福島。(J)

〒456-0022 名古屋市熱田区波寄町 20-14

印刷「エープリント」

TEL・FAX (052) 871-9473